内 容	演題	講師
地域の取組紹介	「テクノロジーを活用した新しいネット	一般社団法人まちテレ
【香川県】	メディアへの取り組み」	専務理事 中野 裕介 氏



まちテレは市役所の裏の四番丁スクエア(市の施設)のインキュベーションとして活動している。

まちテレの取組として、今年の夏には「チームラボと香川 夏のデジタルアート祭」というイベントの中で、メディアアートという新しい試みにチャレンジした。水で幕を作り、そこにプロジェクタで絵を重ねあわせてインタラクティブアート空間を作った。「チームラボ」の猪子さんは徳島出身の方である。去年の今頃はチームラボと連絡を取りながらイベントの準備をしていた。ただイベントで賑わいをつくるだけでなく、最先端のデジタルアートの現場を知りたい・参加したい・新しい

ことにチャレンジしたいということで、最新のテクノロジーを活用した取組を行った。

また、12月10日からはフランスのケーブル放送にて高松を紹介する番組が放映されている。これはテレビ新広島と協力し、観光プロモーションの財団から補助をいただき実施したもので、フランスの放送局に提供することでもコンテンツ発信に力を入れている。

普段は高松市の様々なイベントをインターネットで配信している他、世界中の人に見ていただこうということで高度な中継技術や映像制作に取り組んでいる。例えばトライアスロン大会の中継では、選手のバイクに取り付けた小型カメラからの映像を合わせてインターネット放送を行っている。また、現代源平屋島合戦絵巻というイベントでは、マルチコプターによる空撮映像を中継しながら、サッカー選手がサッカーボールで的を射落とす、ということをした。古代山城サミットでは、通信状態の悪い山間部からの映像を回線でリレーして、会場にてイベントの様子をみていただいた。また、10周年記念事業として、専門性が必要とされる四国アイランドリーグの野球中継を行った。その他、市民活動センターでクロマキー合成を使った番組制作をした。これまでと違ったアプローチということでは、メディアアート祭でCGを使った中継を行っている。

大学で研究開発し、新しい技術を作るだけでは地域の賑わいづくりには役立っていない。学生たちの情報 通信の知識をいかにして地域に活かすか、ということで2010年に無線LANの広域スポットを利用して 香川大学の学生たちが大規模な中継にチャレンジをし、注目を集めた。その後も多くのイベント中継の相談 を受けるが、大学生は忙しく対応が難しい。2012年にe-とぴあ・かがわにネット中継システムが導入されてスタートした「ライブメディアコーディネータ養成ワークショップ」講座などでスキルを身につけてもらうなど、新しい人材を地域から生み出し、地域の情報発信に取り組んでもらうことが重要である。

まちテレのスタッフは10人くらいで、いろいろな地域で活動しているが、動画配信だけで収益をあげることは難しい。社内に人材をそろえて情報発信していかなくてはならない。

問題点としては、地域のイベントは土日に多く、平日の仕事は少ないことである。そこで、マルチコプターを使った空撮など高度な映像制作を組み合わせていきながらインターネット放送に取り入れている。高度なネット中継や様々な新しい技術などにチャレンジをすることで、今までになかった創造的なスタッフが育ってきているのではないかと思う。少ない人数でも動画で発信することが当たり前になり、映像コンテンツの制作業務は増えてきている。

コンテンツについてはこれまでは東京発信が主流であったが、今は地方からの発信が可能であり、発信先が東京である必要はなくなっている。地方から映像発信をする上で、単に制作して発信するだけではそれだけになってしまう。スキルを磨いて、今後はテクノロジーとメディア、テクノロジーとアートとの融合したコンテンツ制作に力を入れていく必要がある。

く質疑・応答>

愛媛大学・坂本先生: すごい取組をされている。新しい技術を活用しながら、地域でいろいろな資源の掘り 起こしを展開していく上でのネックと、今後の解決策について伺いたい。

中野氏:映像制作は3年前からやってきた。その間、スタッフは新しい技術を自分で勉強してきた。

スリランカの視察をしたとき、環境がそろっている大学の学生たちはユーチューブ等で自発的に学習し、発信している。環境が整っていれば自発的に学習するようになるのだと思った。

香川県には情報発信のための施設が整ったe-とぴあ・かがわがあり、このような施設は四国の他県にはない。 ここでは映画制作やデジタル写真の講座など、ICTを高度に活用する人材育成を推進する場がある、とい うことが起爆剤になっている。